

第11回 日本言語文化学会報告

12月9日午後2時から行われた第11回目の日本言語文化学会は、発表者が5名というこれまでにない盛況で、会は暗くなるまで続きました。

最初の菊地民子さんと猪狩美保さんの「会話授業における客観的な授業分析の試み」は、授業観察法FOCUSについての検討がなされました。これは日頃日本語指導に携わる私たちにとって非常に示唆に富むものでした。

カロリーナ・ネグリさんの「川端文学と古典の世界--『旅』のモチーフをめぐって--」は、旅という視点から康成の世界を探るという発表で、古典までも視野に入れた点などに意欲が伺われました。

印省熙さんの「日本語の二重否定表現について」は、日本語では多用されるものの、学習者にとっては習得困難な二重否定表現の特徴を、基本動詞との結合関係とともにおこなった興味深い分析でした。これも日本語学習者としての経験を生かした研究と思われます。

20分の休憩後、4番目にモナシュ大学の小川京子先生の「日本語通信教育課程3年次コース・教材開発について」が発表されました。これはオーストラリアの日本語学習者向けのテキストに関するもので、学習者と日本人とのコミュニケーションに焦点を当てた活動や、自律学習能力の習得などをとりあげている点が注目を集めました。

最後のメルボルン大学の宮城徹先生は「グループオーラルテストの開発と実施」というテーマで、新しい評価法をOPIと比較しつつ紹介されました。これにも多数の質問が寄せられ、参加者の関心の強さが感じられました。

今回の発表者は国外からの参加であったり、国籍もイタリア・韓国であったり、当研究会初(?)の男性であったり、バラエティに富んだ会になり、これからの幅の広がりが期待されました。

今後さまざまな方々からの多数のご応募をお待ちしております。

(田代ひとみ)